

特集

コスプレ世代に届ける天文教育・地域の

アニメイベントの一コンテンツとしての天文

渡辺謙仁（北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院）

1. はじめに

日本のアニメなどは国内のみならず海外からも注目され、アニメキャラクターなどに扮するコスプレもまた、オタク趣味やハロウィンの一般化に伴って、若い世代を中心に普通の行為になってきている。発表者は、近年の参加者数が 5 万人を超える TOYAKO マンガ・アニメフェスタ（以下、TMAF）において、過去 6 回にわたりアニメファンやコスプレイヤーに向けた観望会などの天文イベントを実施してきた。他方、アウトドア市場の中でも特にキャンプが好調という社会的背景も存在する。外岡は次のように報告している。

2016 年の国内アウトドア市場規模は 4,274 億 3000 万円と推計されることが、矢野経済研究所の調査より明らかになった。キャンプやハイキング、釣りなど自然環境と関わる「ライトアウトドア分野」が市場全体の半分以上を占めている。（中略）キャンプは、メディア露出の増加やキャンプ場設備の整備、用品の改良などによりハードルが低下し、若年層からファミリー、シニア層まで幅広い世代で関心が高まっている[1]。

加えて、天体観望はキャンプにおけるアクティビティとして人気がある。このような社会的背景から、発表者は 2018 年の TMAF において、キャンプ気分を味わいながら天体観望などができる天文イベントを実施することにした。本発表では、この天文イベントについて報告する。次節では、TMAF の概要を紹

介する。

2. TOYAKO マンガ・アニメフェスタとは何か？

TMAF では洞爺湖温泉街全体等がコスプレ会場になり、参加者は温泉街等でコスプレ撮影を行ったり、コスプレのまま飲食店や土産物店に入ったりすることが可能である。また、コスプレパレード、参加者の「痛車」の展示、アニメ等の複製原画展、声優・アーティストのライブ等の、主催者による企画がある。2010 年から毎年 6 月の週末の 2 日間開催しており、2018 年で 9 回目を迎えた。主催者発表によると、2018 年は約 7.3 万人が参加した。

TMAF のようなイベントが観光に与えたインパクトとは何だったのであろうか。張は次のように言っている。

TMAF では、一般的な観光における主催者と訪問者、即ちホストとゲストの関係の逆転が見られる。例えば、コスチュームプレイ（コスプレ）をする人や痛車というキャラクターを装飾した車の展示に参加する人は、（中略）参加者であると同時にフェスティバルを構成する重要な要素でもある。そうした参加者は、空間のイメージを作ることで、TMAF 全体の雰囲気を作る役割をする。また、地域住民は、ホストであると同時に、コスプレをして参加する、もしくは様々なプログラムに観客として参加する参加者、すなわちゲストの役割をすることもある[2]。

コスプレをしたゲストが観光資源にもなり、従来の観光学で言われてきた固定的なホスト／ゲストの二分法が崩れたことが、TMAFのようなイベントが観光に与えたインパクトだと言えよう。TMAFで天文イベントを行ってきた発表者自身も、地域の外から来たゲストであると同時に、天文イベントをゲストに対して提供するホストであったと言える。

3. 天文教育活動の概要

今回のTMAFにおいても過去のTMAFと同様、夜と昼に天文イベントを実施した。今回の天文イベントは、「ほしキャン△湖畔の星と宇宙シアター」と銘打った。今回の天文イベントの狙いは、ゆるいキャンプ気分を味わいながら、テントに寝転んで星空を眺めたり、望遠鏡で天体観望をしたり、天体シミュレータのMitakaの映像を見ながら宇宙の話を聴いたりしてもらうことであった。イベントブースに設置したテントやキャンプ用チェア等のキャンプ用品はキャンプ気分の演出に使用するとともに、参加者にコスプレ撮影や雨宿りにも使ってもらうことにして、TMAFに溶け込むことを目指した（図1）。



図1 キャンプグッズでキャンプ気分を演出

にわか雨に降られ、参加者にテントの中で雨宿りをしてもらうくらいに天気はあまりよくなく、残念ながら天体観望はできなかった

が、テントの中でバッテリー駆動のプロジェクターを用いてMitakaの映像をテントの生地には投影し、宇宙の話を聴いてもらった。事前に想定していなかったことだが、テントの生地が薄かったために、プロジェクターの光が生地を透過し、テントの外からもMitakaの映像が見え、テントの外にいる参加者も中で行われていることを垣間見ることができた（図2）。



図2 テントの中でMitakaを上映

十分な厚みがあり遮光性能が高いシルバーシートがネット通販で安価に入手できたため、昼間はテントの上にシルバーシートを被せて遮光した。シルバーシートを被せることで遮光の目的は達することができたが、風通しが悪くなり、6月の北海道といえども日差しが照り付けるとテントの中はサウナのように蒸し暑くなって、参加者には不評であった。ある参加者によると、テントの中には5分いるのが限界だったという。昼間の暑さ対策は今後の課題である（図3）。

なお、天文イベントのブースは湖畔に設けられ、昼間は近くにあった湖畔ステージで歌唱などのステージイベントが行われていたため、ステージの幕間にはその見学客に声を掛け、天文イベントのブースに招き入れることに努めた。また、昼間はMitakaの上映のほか、洞爺湖越しに見える羊蹄山を天体望遠

鏡で観察したりした。発表者に協力してくれたスタッフの参加者に対する対応が上手く、これが好評であった。



図3 昼間はシルバーシートで遮光

昼間に天体望遠鏡を用いたイベントを行う場合、イベントで扱う対象を天文に限定せず、山等の地形や動植物といった地上の目標を望遠鏡の視野に導入し、地質学や生物学、あるいは望遠鏡の光学的な仕組みに関する解説を行ってもいいかもしれない。また、用意した望遠鏡の中には、アニメ調のキャラクターが描かれた市販のシールを貼り付けた「痛望遠鏡」もあった。これは、アニメ調のキャラクターが描かれた「痛車」の望遠鏡版である。

イベントでは参加者アンケートも実施したが、本発表時までに発表に耐えうる分析ができなかった。一方で、イベント終了後にTwitterでの本イベントに対する反響を調べた。その結果、テントの中が蒸し風呂のように暑く、せっかくのMitakaを用いた解説が頭に入ってこなかったとか、テントの中に潜り込んでMitakaの映像を眺めるのは心理的な難易度が高くスタッフに声を掛けられなかったとか、痛望遠鏡が本当に素晴らしかったから自分も痛望遠鏡を作りたいといった意見が収集された。今回制作した痛望遠鏡は市販のシールを貼り付けただけの簡易なものだったが、評判は良かったようだ。一方で、参加

するうえでの心理的障壁や暑さといった点で、テントの中でのMitakaを用いた解説には課題が残る。

4. まとめ

本発表では、発表者が2018年のTMAFにおいて実施した天文イベントについて報告した。従来の観光学で言われてきた固定的なホスト／ゲストの二分法が崩れているTMAFにおいて、発表者もホストであると同時にゲストとして振舞うことで、TMAFに溶け込む天文イベントを目指した。本イベントはコスプレ世代に届ける天文教育の実践であり、ここでは天文は地域のアニメイベントの一(いち)コンテンツであったと言える。本イベントで用意した痛望遠鏡は市販のシールを貼っただけの簡易なものだったが、好評だったようだ。一方で、気軽にブースに立ち寄ってもらうための工夫や、Mitakaの快適な視聴環境には課題が残った。また、参加者アンケートの分析は今回間に合わなかったので、今後分析したい。

謝辞

本イベントをお手伝いくださった藤森和久さま、鈴木麟太郎さま、北海学園大学天文サークル有志のみなさま、本イベントの開催をお許しくださり様々な形で協力くださったTOYAKO マンガ・アニメフェスタ事業推進委員会 / (社)洞爺湖温泉観光協会のみなさま、色々ご支援くださった山村高淑先生と北海道大学国際広報メディア・観光学院の学生・修了生のみなさま、本イベントにご参加くださったみなさまに感謝いたします。

文献

- [1] 外岡紘代 (2017)「アウトドア市場規模は4,274億円、キャンプが好調」、リセマム, [Online]. Available: <https://resemom.jp/ar>

ticle/2017/10/18/40895.html. [Accessed:
09-Feb-2019].

- [2] 張慶在 (2016)「コンテンツツーリズムと
してのポップカルチャーイベント：
TOYAKO マンガ・アニメフェスタの事例
を通して」, *International Journal of
Contents Tourism*, 1.2 : 45-52.



渡辺 謙仁

(TMAF2018にて。一応、「ゆるキャン△」の
コスプレです。)

* * * * *